

連載 “Well-being” ことはじめ

第10回 “サハラのお話：幸福は歴史の問題でもある”

臨床心理士・カウンセラー 三村 和子

これまでに引き続き、レオ・ボルマンズ氏によってまとめられた「世界の学者が語る『幸福』」に示された格言を用いて、目の前の具体的な問題を、基礎情報学をもとに検討していきたい。今回のメッセージを読んでみよう。

「幸福は歴史の問題でもある」

このメッセージを記したのは、アルジェリアのオラン大学の教授ハビブ・ティリュイヌ氏で、イスラム諸国の生活の質、幸福の研究、そして開発・教育政策に携わってきた。長年アルジェリアの人々の幸福感を調査しており、18か月ごとに1万人以上の人と面接している。今回のメッセージは、1990年代の初め以降、アルジェリアで起こった内戦、そして近代化などの影響を受けて、ウェル・ビーイングがどのように変化したかということに焦点を当てている。

ティリュイヌ氏が行った調査結果によると、アルジェリアにおける生活への満足感と主観的ウェル・ビーイングは「たいてい先進国より低い」。これは、生活水準の低さによるものと推定される。一方、アルジェリア国内における所得水準と幸福感にはコミュニティによる違い、そしてパラドックスがあることを指摘する。南部のコミュニティでは「家族の強い絆、個人間の高い信頼、宗教的な強い兄弟愛であるザウイーヤ、治安問題の少なさといった伝統的な社会制度が存続している」一方、「北部のコミュニティでは、伝統的な社会連帯感を失ってしまっており、一体感が弱い。そのため、個人の幸福に負の効果をもたらす」という。

2つのコミュニティの違いについては、「歴史的に言えば、アルジェリア南部（サハラ地域）は、外国からの影響——主にフランスの植民地政策——から隔たっている。北部における植民地支配の重圧は、個人生活と社会生活のほぼあらゆる面を混乱させた。したがって、幸福は歴史の問題とも言えるだろう」とティリュイヌ氏は語る。

更に、ティリュイヌ氏の研究結果では、社会的混乱の悪影響が徐々に解消し、国の経済が徐々に改善するにつれて、国民のウェル・ビーイングも少しずつ高まっているという。「幸いなことに、人間社会には回復機能が本来備わっていて、そうした衝撃に立ち向かうのを助ける」。その一方で、社会集団の間で、幸福度に多様な格差が生まれ始めていると指摘する。この要因として、「良い学歴」「配偶者（既婚者の方が幸福度が高い）」「信仰／精

明生活をもっていること」「健康」の4つの要素に加えて、「変化への対応」があるとし、明確な教訓を見出せると次のように語る。

個々の社会はそれぞれ独自のペースで変化を受け入れる。ただし、もし早い変化が必要ならば、統治者は十分な思慮分別をもって、人々を非人道的に扱わないように、そして、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」を壊さないようにするべきである。（中略）基本的な安定を保ちつつ、いかにして国を近代化するかということは、指導者達の最大の関心事でもあり、また最大の課題でもあるに違いない。

今回のキーメッセージは以下の3つである。

- 1) 幸福は歴史の問題でもある。個々の社会はそれぞれ独自のペースで変化を受け入れる。
- 2) 伝統的な地域に暮らす貧しい人々は、近代的な地域の裕福な人々よりも幸福なことがある。
- 3) 個人の人生にいくらかの安定があることが人の幸福にとっての必要条件である。

ここで、ティリュイヌ氏のメッセージが、IS^{*1}技術者にとってどのような意味があるかについて検討する。

IS 技術者にとって、「変化を受け入れる」ことは重要なポイントである。特に、社会的あるいは技術上の変化などに対応し、新しいことにチャレンジしていく気概が求められるが、現状はどうだろうか。前回のメルマガでも引用した同志社大学による調査（IPA 委託）－「日本のソフトウェア技術者の生産性及び処遇の向上効果研究：アジア，欧米諸国との国際比較分析のフレームワークを用いて」に関する成果報告書，2016、付表 5ヶ国アンケート回答結果（設問別）－より、以下を引用する。

質問 Q30 <会社の方針やあなたが携わっている事業および、あなたの職場の状況において> 失敗やリスクを恐れず、新しいことに挑戦することが歓迎される

（注：Q30 には6つの質問がある。下線部はそのうちの1問）

回答（4件法による）結果は、「あてはまらない」（13%）、「あまりあてはまらない」（37%）や「あてはまる」（39%）「あてはまる」（11%）である。「あてはまらない」＋「あまりあてはまらない」＝50%となる。このことから日本のソフトウェア技術者の半数が「新しいことに挑戦すること」を歓迎されていないと感じていることがわかる。この結果は、中仏独日米の5か国中最悪である。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
中国	7%	23%	55%	16%
フランス	9%	27%	22%	12%
ドイツ	17%	23%	44%	17%
日本	13%	37%	39%	11%
アメリカ	6%	18%	44%	31%

同 Q30 の他の質問でも、「あてはまらない」＋「あまりあてはまらない」の合計は高い結果となっている。

「仕事や研究に関して議論をする機会がある」：46%

「指示された業務以外の個人の発想に基づいた作業が黙認されている」：52%

「社内の意思決定のスピードがある」：72%

このことから、ソフトウェア技術者は仕事上活気に満ちた状況にない、そして刺激的ではない環境におかれていると推定される。

ここから、IS 技術者が新たな発想を求められる場面、例えば、顧客企業の次期システム構想の策定に携わることを想定して、基礎情報学による分析を用いて検討を行う。政治システム（成果メディア^{*2}：権力）、経済システム（成果メディア：貨幣）、学問システム（成果メディア：真理）、家族友人システム（成果メディア：愛）以外に、企業組織、地域コミュニティ、IS 産業、プロジェクトなどいくつかの社会システムが IS 技術者のコミュニケーションという出来事に拘束／制約を加えている。

IS 技術者が顧客企業のキーマン社員と打ち合わせをしていると、IS 技術者とキーマン社員の心的システム^{*3}では、発せられる会話の内容や議論、提示された文書資料が刺激となり、脳内の記憶が呼び出されながら思考コミュニケーションが次々と産出される。IS 技術者の心的システムは上位のプロジェクト HACS^{*4}から機能的な制約を受け、構造的にカップリングしている。その際の IS 技術者の心的システムの成果メディアは仕事上のやりがいであるが、経済システムの成果メディアである貨幣により、次のような思考コミュニケーションが散発される。

- ・プロジェクト単体として収益をあげられるだろうか
- ・長期的に事業として収益を上げられるだろうか
- ・失敗した場合、自分の評価はどうなるだろう、報酬にひびかないといいが
- ・工夫や追加した時間は報われるのだろうか
- ・自社の事業展開の方向性から外れることはないだろうか など

この IS 技術者の上司は、IS 技術者のコミュニケーションを顧客との打合せから戻った時の様子、打合せの報告内容、次期システム構想案に関わる文書などから観察する。企業

組織システムにおいては、継続して IS 技術者を観察する上司と部下の階層関係が重要なポイントになる。IS 技術者が成果物として次期システム構想案を作成しまとめるプロセスで、上司は企業組織システムとしての価値／意味を吟味していくが、ここで次期システム構想に関わる「意味構造の更新」が行われる。

上位の企業組織システムが下位のプロジェクトシステムに拘束／制約を与え、更に下位の IS 技術者の心的システムに影響を与える。次期システム構想において「新たな何か」を探求する意思決定の段階で、上司から効果的な働きかけがあれば、IS 技術者のやりがい感の醸成につながる。例えば、上司が「安心して任せるよ」と IS 技術者への信頼感を示したり、IS 技術者が見落としがちなポイントについて指摘をするという働きかけが考えられる。また、IS 技術者が何となくもやもやして漠然と抱える心配事を上司が察知し、IS 技術者にヒントを与え、結果として IS 技術者が気づきを得て発想を転換するなどのコミュニケーションも効果があるだろう。こうした IS 技術者の心的システムにおけるやりがい感、プロジェクトという社会システムの拘束／制約を受けるプロジェクトメンバーに伝播し、企業組織という社会システムの下で他の複数のプロジェクトを良い方向に導く可能性がある。このような状態になれば、この IS 企業は活気に満ち、刺激的な環境となり、IS 技術者は変化を楽しむことができ、より仕事上のやりがい感が増すのではないか。このようなコミュニケーションが蓄積された場合、やりがい感が下位のプロジェクトシステムから上位の顧客企業 HACS の作動ヘフィードフォワードされると想定できる。

IS 技術者の方々がやりがいを持って働くことができるよう、そして組織がよい方向に向かうために何がよいのかについて、本稿では今後も探って参ります。皆様からのご指摘やご意見をお待ちしています。

<注釈>

*1) IS とは：

Information Systems を指し、技術中心ではなく、人間中心の情報システムを想定し、あえて IT、ICT ではなく、IS としている。

*2) 成果メディアとは：

基礎情報学でコミュニケーションを秩序づけて成立させる機能を示す。例えば、価値判断のようなものを指す。

*3) 心的システムとは：

「思考」を構成素とするオートポイエティック・システムである。心的システムは常に脳神経システムと相互作用し、「原一情報」（＝生命情報）を素材とした思考が産出され、記述行為によって社会情報が形成され、人間社会で通用する意味内容を含んだ情報が現れるとされる。

*4) HACS とは：

Hierarchical Autonomous Communication System の略。「階層的自律コミュニケーション・システム」 基礎情報学の主要な概念であり、情報の意味伝達モデルである。人の心的システムの上位概念に社会システムがあり、さらにその上にマスメディア・システム

があるとして階層的に位置づける点の特徴である。

<参考文献>

- ・レオ ボルマンズ編[猪口孝 監訳] (2016) 世界の学者が語る「幸福」 西村書店
- ・西垣通 (2004) 基礎情報学：生命から社会へ NTT 出版
- ・西垣通 (2008) 続 基礎情報学：「生命的組織」のために NTT 出版
- ・西垣通 (2012) 基礎情報学の射程：知的革命としてのネオ・サイバネティクス.
情報学研究：東京大学大学院情報学環紀要 83, 1-30, 2012-10-01
- ・学校法人同志社 同志社大学, 「日本のソフトウェア技術者の生産性及び処遇の向上効果研究：アジア, 欧米諸国との国際比較分析のフレームワークを用いて」 に関する成果報告書, 2016 ※独立行政法人情報処理推進機構 委託